

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0548 ◆◆◆

19/08/28

【「お喋りランプ」の発言を考える】

ツイッターというSNSを駆使したトランプ米大統領の発言が、連日のように相場の波乱要因となっている。その典型は、9日から18日の「夏休み期間」。日本もちょうど盆休みの時期にあたるため、流動性の低下を受けた「開店休業」の展開になるとタカをくくっていたのだが、通常業務時と変わらないか、それ以上のトランプ発言が聞かれ、相場が大荒れの展開をたどったことは、まだ記憶に新しい。今回の当レターでは、ここ1-2週間に聞かれた「お喋りランプ」の発言について、色々と考察してみたい。

◎対照的な対応、「激甘」な先は徹底的にかばう傾向も

トランプ発言を調べてみると、まずは「非常に厳しい言い返し」をされる先と、何故か「激甘」な対応で妙に可愛がられている先に大別されていることがわかる。

先に後者である「激甘」について指摘をすれば、代表格はなんといっても北朝鮮だ。ここ1ヵ月足らずのあいだにトータル7回もの「ミサイル発射」を実施しているものの、その都度トランプ氏は「不問の姿勢」を貫いてきた。それどころか、先日7回目の際には、記者団に「金委員長はミサイル実験が好きなんだ」ーといったジョークを飛ばしていたとも言われている。そのため、北朝鮮も知ってか知らずか、やや調子に乗っている感を否めない。事実、11日には朝鮮中央通信が、北朝鮮外務省米国担当局長の話として、「トランプ米大統領が短距離ミサイルの発射を容認した」などと報じていた。来年の米大統領選に向けた点数稼ぎの一環としての発言だということは、ある程度理解できるが、「それにしても、どうしてそこまでかばうのだろう……」と思ってしまうのは、筆者が日本人だからだろうか。

それに対して、改めて指摘するまでもなく、「厳しい言い返し」の代表格は中国だが、なにげに欧州に対しても厳しい論調は少なくない。

ただ、欧州に関して興味深いのは、たとえば先日のG7で会談を実施した英国のジョンソン首相を「素晴らしい首相になる」と持ち上げるなどベタ褒めしていたものの、前任者のメイ首相については「わたしは以前からメイ氏のブレグジットの扱いには非常に批判的だ」としたうえで、「メイ氏はEU離脱に関してとんでもない混乱を引き起こしてくれた。わたしは対処の仕方を指南したが、彼女は別の方法を選んだ」と強く批判していたことが知られている。つまり、政権の交代により態度が一変したことになるわけだ。

また、それと同様のことは、先日「グリーンランド買収」話で話題となったデンマークのフレデリクセン首相に対しても起こっている。

同氏が「買収話は馬鹿げている」と発言したことを糾弾、9月の外遊中止を指摘したほどだったが、その2日後には同氏から電話があったことを明かしたうえで、「素晴らしい会話だった。彼女は素晴らしい。とても感謝している」などとスタンスを180度転換し、褒めちぎっていたという。

一方、そんなトランプ氏、嫌いな人物には執拗に粘着するということも数多くの局面で観測されている。こちらの典型事例は、国内において。具体的にはパウエルFRB議長に対して、となるだろう。実際、比較的最近の発言だけを取り上げても、「中国や他国との通商交渉はうまくいっている。唯一の問題はパウエル議長とFRBだ」(21日)、「パウエル議長が辞任するなら止めない」(23日)ーなどといった個人攻撃だけでなく、「FRBは時間をかけて100bpの利下げをするべき」(21日)、「追加利下げ実施なら史上最高の経済成長も」(22日)、「あまりにも長期に判断を誤り続けた」(27日)といったFRBそのものに対する圧力も連日の如く聞かれていた。

いずれにしても、上記のようにトランプ氏は、利害関係において敵対する人物は徹底的に叩くことが明らかであるだけでなく、自分の主義主張にそぐわない、考えの異なる人物も大いに忌み嫌う傾向にあるのかもしれない。しかし、自分の懐に入るような人物に対しては、逆にある種の「身内意識」が発生するのか、徹頭徹尾擁護することが少なくないようだ。

したがって、G7などの国際会合においては、安倍首相をはじめ、各国首脳も機嫌を損ねることのないよう、

